2020年度春学期授業評価アンケート集計結果について

2021年5月10日

＜設問別＞

※問いは大きく四つのカテゴリー、＜Ａ：履修者の自己評価＞／＜Ｂ：シラバスについて＞／＜Ｃ：担当者と授業について＞／＜Ｄ：授業の成果について＞に分けられ、全部で10の問いがある。これに加えて、問11として＜Ｅ：授業外学修時間＞について尋ね、最後に、授業改善に向けた自由記述が出来るようになっている。この結果をもとに、科目担当者はシラバスの振り返り項目にレスポンスを記入することになっている。

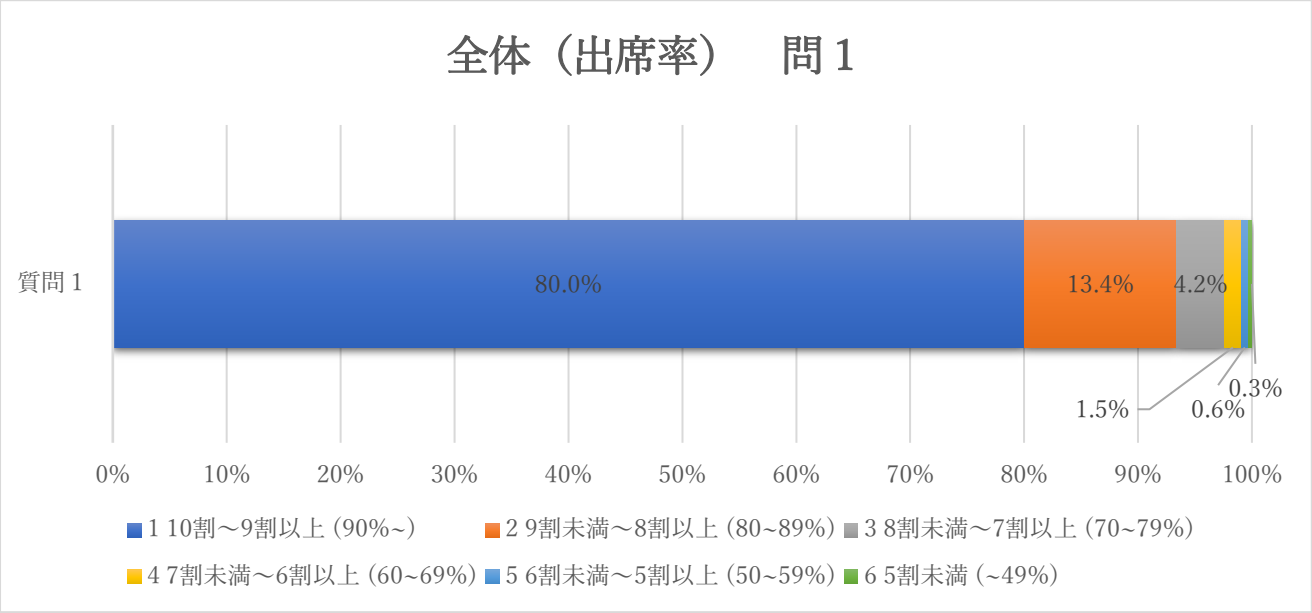
設問区分		設問
A	問1	どのくらいの割合でこの授業に出席しましたか。 ※該当するものにマーク①10 割～9 割以上（90%~）、②9 割未満～8 割以上(80~89%)、③8 割未満～7 割以上（70~79%)、④7 割未満～6 割以上（60~69%)、⑤6 割未満～5 割以上（50~59%)、⑥5 割未満（~49%)
	問2	私は、自主的かつ意欲的に取り組んで、この授業を受けた。
	問3	あなたの授業中のマナー（私語・携帯電話・遅刻等）は良かったですか。
B	問4	私は、この授業を履修する際、何を学習するかを理解するために、シラバスを読んだ。
	問5	担当者は、シラバスで授業の目標や計画、授業の評価方法を適切に示していた。
C	問6	授業は担当者の教え方（説明の仕方や話し方）は適切だった。
	問7	授業の内容はわかりやすかった。
	問8	授業の進度は適切だった。
	問9	授業担当者は、学生が質問や相談をしやすい環境・雰囲気作りを行い、適切な助言を与えたり質問に答えたりしてくれた。
D	問10	総合的にみて、この授業は私にとって有益だった。
E	問11	この授業の授業時間外の学習時間（授業１回ごとの平均） ※該当するものにマーク①4時間以上、②3～4時間、③2～3時間、④1～2時間、⑤30 分～1時間、⑥30分未満

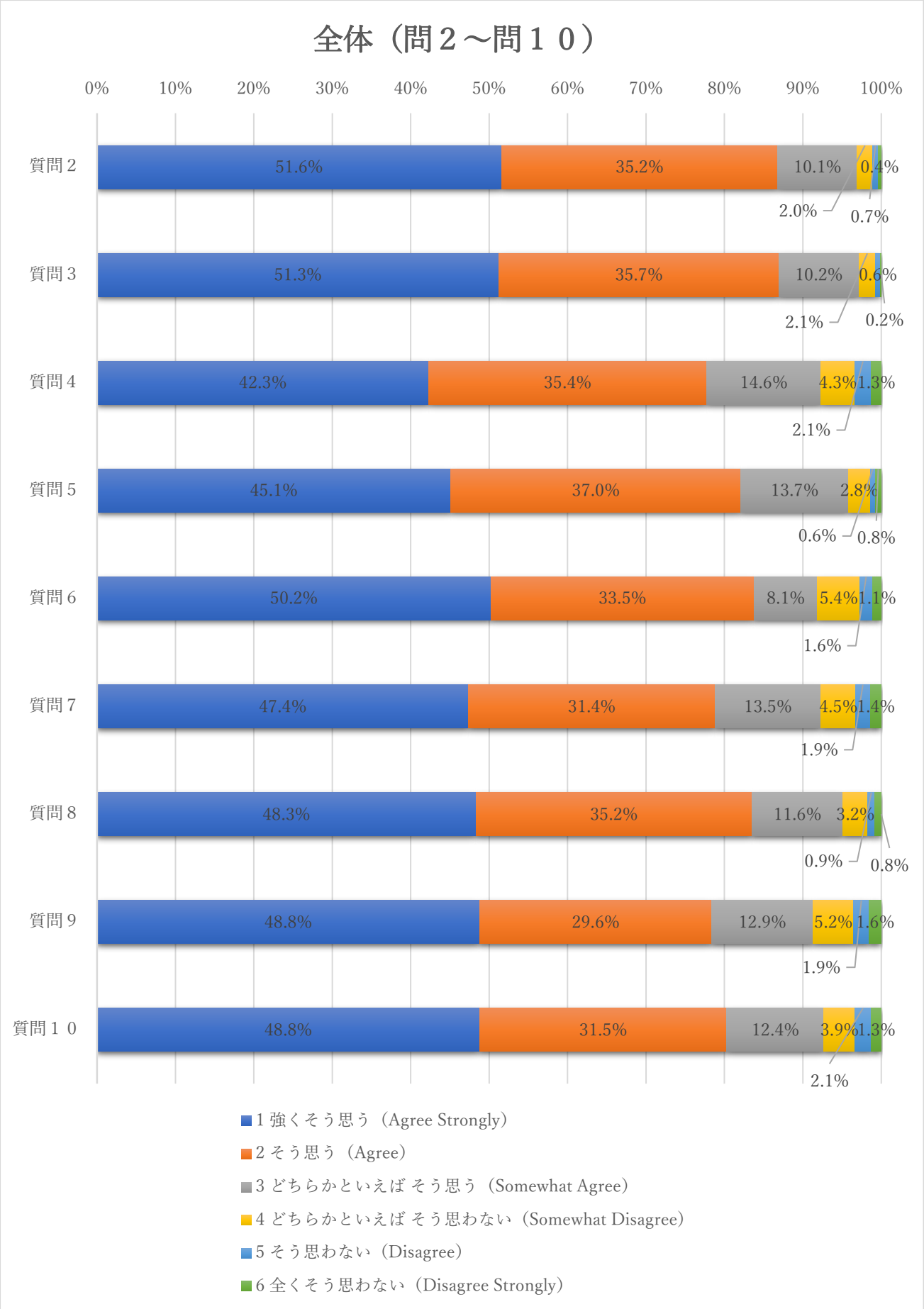
※問いに対する回答（１～11）は、以下の選択肢から選ぶように求められた。（問１と問11は質問票の通り）

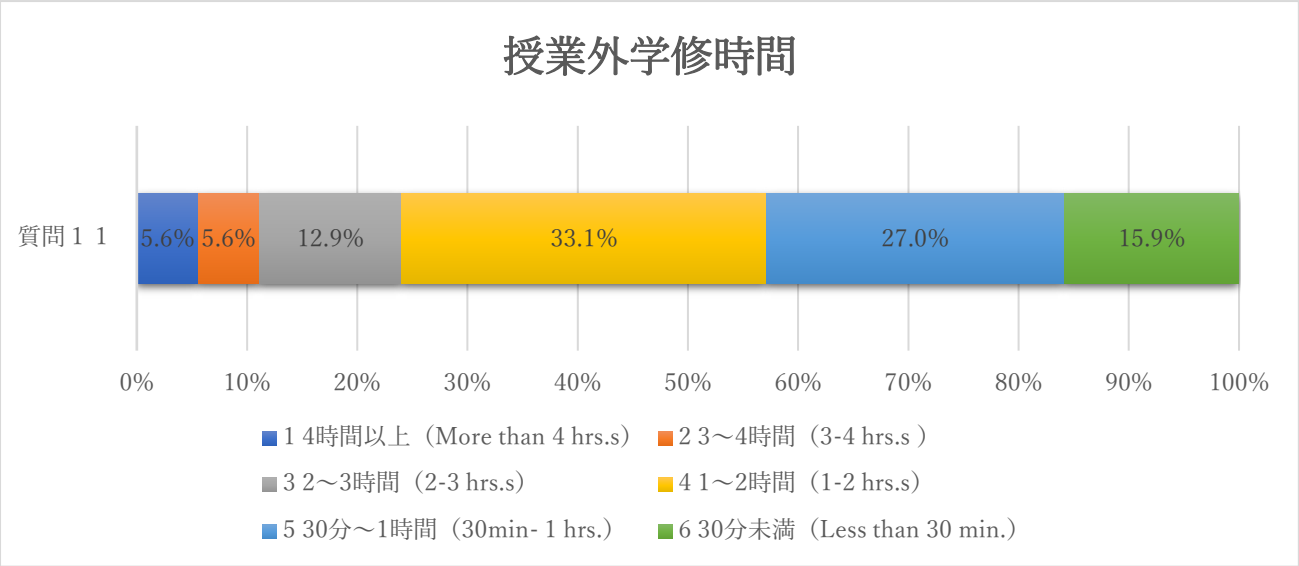
回答内容	マークシートの記入番号
強くそう思う	①
そう思う	②
どちらかといえばそう思う	③
どちらかといえばそう思わない	④
そう思わない	⑤
全くそう思わない	⑥

＜教育課程全体について＞

科目登録人数（7642人）のおよそ66.6％（5096人）から有効回答（昨年度同期53％）を得た。教育課程全体として、ここ数年来特に変化なく、①「強くそう思う」から③「どちらかといえばそう思う」の肯定的評価を受けており、特にカテゴリーC とD においては教育課程全体として９割以上のプラス評価を受けたといえる。なお、一昨年度から、マークシートによる回答方式からWEB 上での回答方式に変更している。




全体（問２～問１０）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
質問２
51.6%
35.2%
10.1%
0.4%
2.0%
0.7%
質問３
51.3%
35.7%
10.2%
0.6%
2.1%
0.2%
質問４
42.3%
35.4%
14.6%
4.3%
1.3%
2.1%
質問５
45.1%
37.0%
13.7%
2.8%
0.6%
0.8%
質問６
50.2%
33.5%
8.1%
5.4%
1.1%
1.6%
質問７
47.4%
31.4%
13.5%
4.5%
1.4%
1.9%
質問８
48.3%
35.2%
11.6%
3.2%
0.9%
0.8%
質問９
48.8%
29.6%
12.9%
5.2%
1.6%
1.9%
質問１０
48.8%
31.5%
12.4%
3.9%
1.3%
2.1%
1 強くそう思う（Agree Strongly）
2 そう思う（Agree）
3 どちらかといえば そう思う（Somewhat Agree）
4 どちらかといえば そう思わない（Somewhat Disagree）
5 そう思わない（Disagree）
6 全くそう思わない（Disagree Strongly）



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問１では97.6％の学生が①～③（7割以上は出席）と回答している。また、問２と問３は④～⑥の消極的回答は３％程度にとどまり、授業科目を意欲的に受けたと自己評価する学生が９割以上となる結果である（質問2：96.9％、質問3：97.2％）。ここ数年来ほぼ同程度の数字であることから、意欲を持って授業にのぞんでいる学生がほとんどだと言えよう。

B. シラバスについて

ここでは問４の④～⑥の消極的回答は、不思議といえばそうだが、昨年度の同学期とほぼ同じであり（7.7％）、依然として科目選択の際にシラバスに目を通していない学生が１割以下ではあるが存在しており、授業の達成目標と自己の関心とのミスマッチなどを避ける上でも、読むことの重要性を引き続き説くことが肝要である。教員側のシラバスの提示内容（問５）については、９割以上が肯定的評価となっており（95.8％）、シラバス作成が定着してきたことがあらわれている。

C. 担当者と授業について

問６～問９の項目では、①～③の肯定的評価がいずれも９割を越えており、教育課程全体としておおむねプラスの授業評価を受けていると言える結果となった。中でも、問８の「授業の進度の適切さ」に関して、特に肯定的評価が高かった（95.1％）。

D. 授業の成果について

問10で授業が有益でなかったと回答をした（④～⑥）学生が7.3％（昨年度7.8％）存在する。問１の意欲を持って授業を受けた学生の裏返しかもしれないが、これをゼロにすることは容易ではない。ここでは、教育課程全体の授業成果について肯定的に受け止めている学生が多いことをむしろ積極的に評価しておきたい。

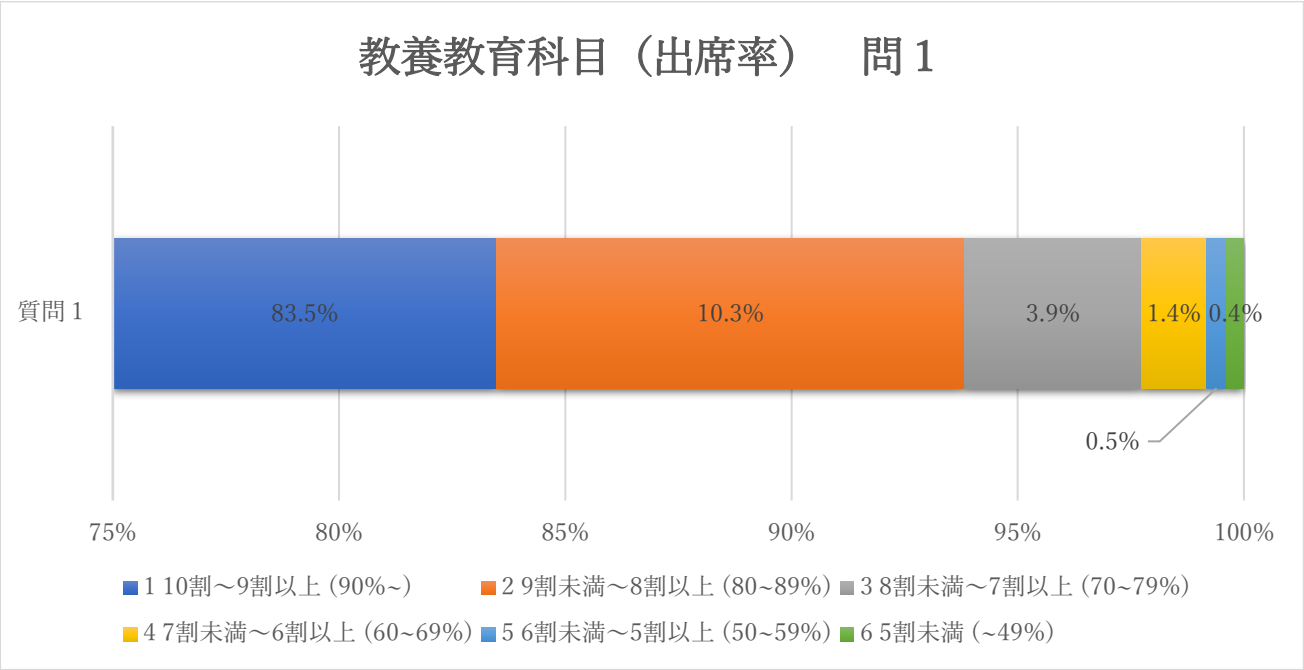
E. 授業外学修時間について

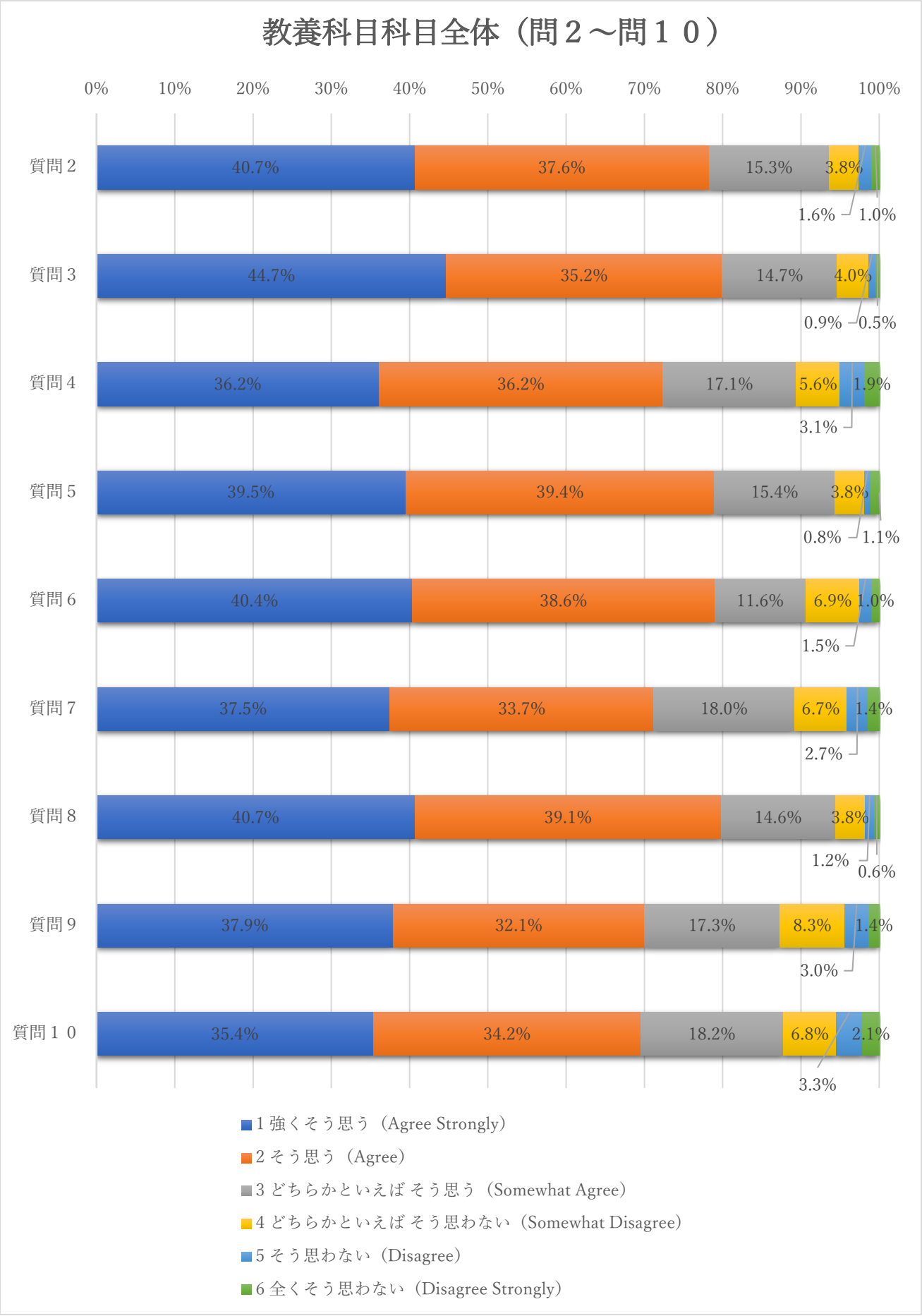
１単位科目（45時間の学修時間必要）では週１回の授業に対し授業外学修時間として１時間必要とされ、２単位科目（90時間の学修時間必要）では週１回の授業に対し授業外学修時間として４時間が必要とされている。本学の教育課程上、１単位設定の語学教育科目が多いとはいえ、昨年と同様、④（１～

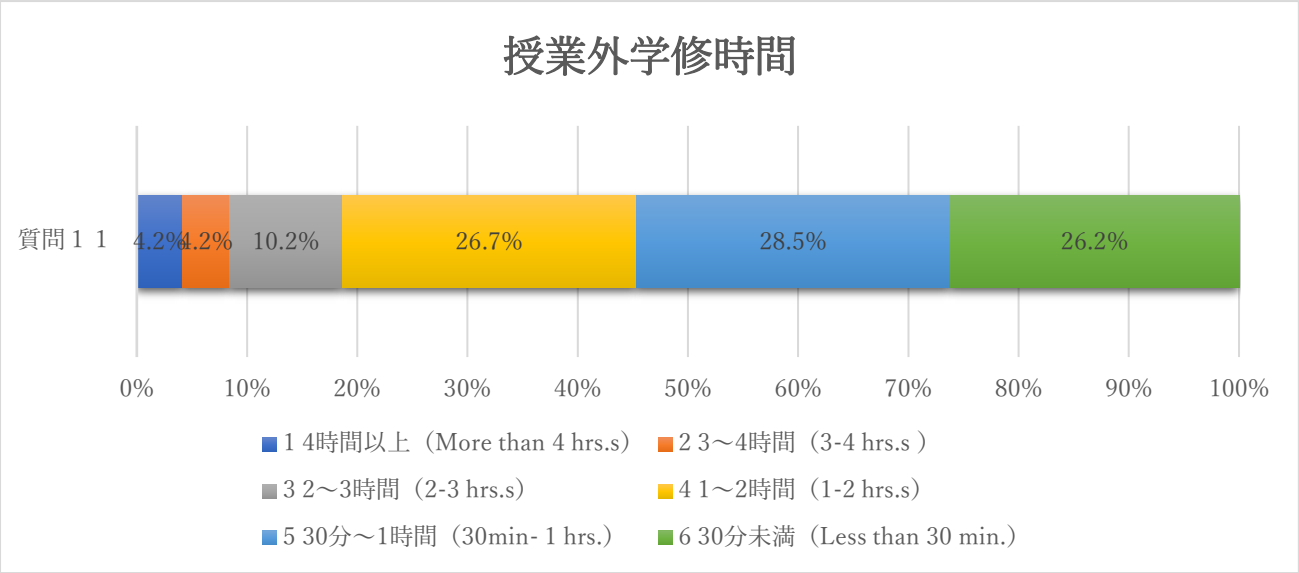
２時間）～⑥（30 分未満）で回答の７割を越えていること（76%）は由々しき状況であるといわざるを得ず、圧倒的に学修時間不足であることを示している。授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する科目設計の実質化が必要である。

＜教養教育科目について＞

教養教育課程としての全体的な傾向としては、授業外学修時間以外は学部教育課程全体の平均を下回っている結果 （科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。




教養科目科目全体（問２～問１０）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
質問２
40.7%
37.6%
15.3%
3.8%
1.6%
1.0%
質問３
44.7%
35.2%
14.7%
4.0%
0.9%
0.5%
質問４
36.2%
36.2%
17.1%
5.6%
1.9%
3.1%
質問５
39.5%
39.4%
15.4%
3.8%
0.8%
1.1%
質問６
40.4%
38.6%
11.6%
6.9%
1.0%
1.5%
質問７
37.5%
33.7%
18.0%
6.7%
1.4%
2.7%
質問８
40.7%
39.1%
14.6%
3.8%
1.2%
0.6%
質問９
37.9%
32.1%
17.3%
8.3%
1.4%
3.0%
質問１０
35.4%
34.2%
18.2%
6.8%
2.1%
3.3%
1 強くそう思う（Agree Strongly）
2 そう思う（Agree）
3 どちらかといえば そう思う（Somewhat Agree）
4 どちらかといえば そう思わない（Somewhat Disagree）
5 そう思わない（Disagree）
6 全くそう思わない（Disagree Strongly）



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問２に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が９割以上（93.6%）いることは良いが、④～⑥の否定的回答が本年度6.4%、昨年度6.7%と一定程度は存在するので、教養教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

科目選択の際にシラバスに目を通していない学生（一昨年度13.3%、昨年度13.8%、本年度10.6%）が、数字が上下しながらも、教育課程全体と比すと10%を越えている状態が続いていることはやはり問題であり、特に教養教育科目の選択においてシラバスを読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問５）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計94.3%）。

C. 担当者と授業について

当該項目では、問６から問９においては、おおむね９割程度の肯定的な授業評価を受けているといえるが、学部全体と比して、特に問９（担当者の応対）が若干低い結果が出ている（全体91.3%、教養87.3%）。これは過去数年間で同じ傾向である。一方で、問６（教え方）、問7（授業の分かりやすさ）、問８（授業の進度）はおおむね９割程度の肯定的評価となっている。

D. 授業の成果について

問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が12.2%（昨年度10.6%）存在するが、おおむね教養教育科目の授業成果を肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、教養教育科目においては教育課程全体に比して一定程度消極的評価の学生が多い傾向が見られる（教養87.8%、全体92.7%）ので、繰り返しになるが、教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

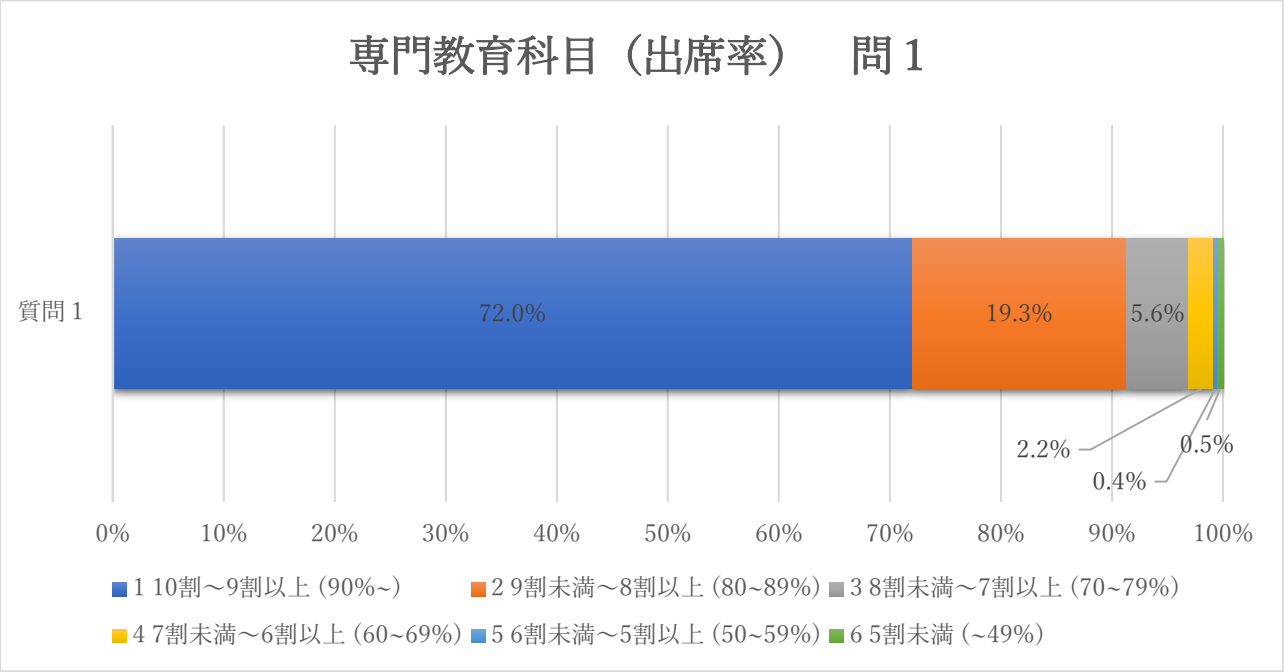
E. 授業外学修時間について

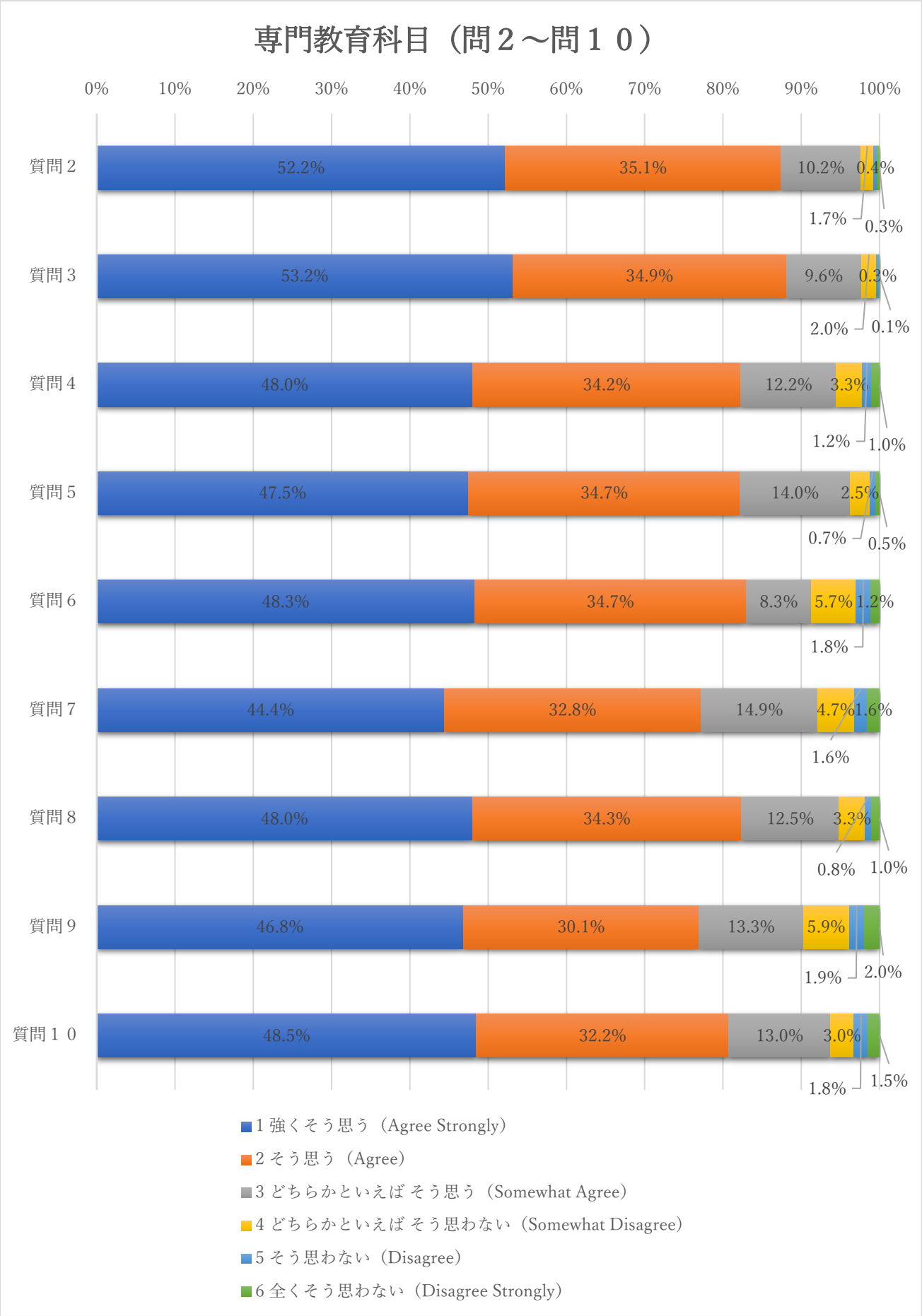
週１回の授業に際し４時間の授業外学修が必要となる２単位科目が多い教養教育科目での、４ 時間以上と回答した学生は、今回の結果は4.2%（一昨年度2%と昨年度7.3%）で、やはり圧倒的に学修時間不

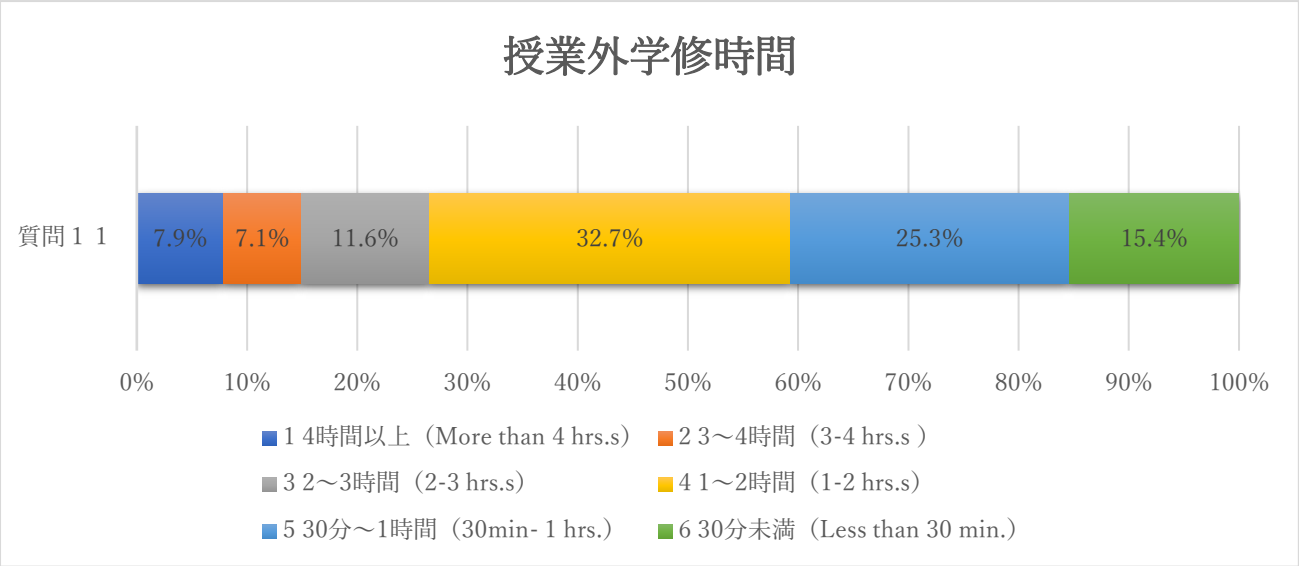
足であることを示している。特に全体と比較して、⑥の回答者が26.2％もいること（昨年度は36％）は問題と言わざるを得ず（授業に出席するだけになっている）、講義系の教養教育科目こそが授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する授業科目設計の実質化が確実に求められることになる。もちろん、繰り返しになるが、学生たちの授業外学修時間を担保する教育課程全体における科目配置も同時に検討されなければならない。

＜専門教育科目について＞

専門教育課程としての全体的な傾向としては、ほぼ学部教育課程全体の平均と同程度の結果 （科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。




専門教育科目（問２～問１０）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
質問２
52.2%
35.1%
10.2%
0.4%
1.7%
0.3%
質問３
53.2%
34.9%
9.6%
0.3%
2.0%
0.1%
質問４
48.0%
34.2%
12.2%
3.3%
1.2%
1.0%
質問５
47.5%
34.7%
14.0%
2.5%
0.7%
0.5%
質問６
48.3%
34.7%
8.3%
5.7%
1.2%
1.8%
質問７
44.4%
32.8%
14.9%
4.7%
1.6%
1.6%
質問８
48.0%
34.3%
12.5%
3.3%
0.8%
1.0%
質問９
46.8%
30.1%
13.3%
5.9%
1.9%
2.0%
質問１０
48.5%
32.2%
13.0%
3.0%
1.8%
1.5%
1 強くそう思う（Agree Strongly）
2 そう思う（Agree）
3 どちらかといえば そう思う（Somewhat Agree）
4 どちらかといえば そう思わない（Somewhat Disagree）
5 そう思わない（Disagree）
6 全くそう思わない（Disagree Strongly）



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問２に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が９割以上（97.5%）いることは良いが、④～⑥の否定的回答が本年度2.4%、昨年度2.4%と少数であるが、一定程度は存在するので、専門教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

科目選択の際にシラバスに目を通していない学生（昨年度5.9%、本年度5.5%）が、教育課程全体の6.6%よりやや低いものの、一定数は存在していることは問題である。専門教育科目の選択においてもシラバスを読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問５）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計96.2%）。

C. 担当者と授業について

当該項目では、問６から問９において、９割以上からおおむね肯定的な授業評価を受けているといえる。教養教育課程と比べてみると、特に問９（担当者の応対）が若干高い結果が出ている（専門90.2%、教養87.3%）。教養教育科目と比べると専門教育科目の方が総じて少人数のクラスが多く、学生が質問しやすい環境になっているのではないかと思われる。

D. 授業の成果について

問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が6.3%（昨年度4.4%）存在するが、おおむね教養教育科目の授業成果を肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、教養教育科目において教育課程全体に比して一定程度消極的評価の学生が多い傾向が見られるので、繰り返しになるが、教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

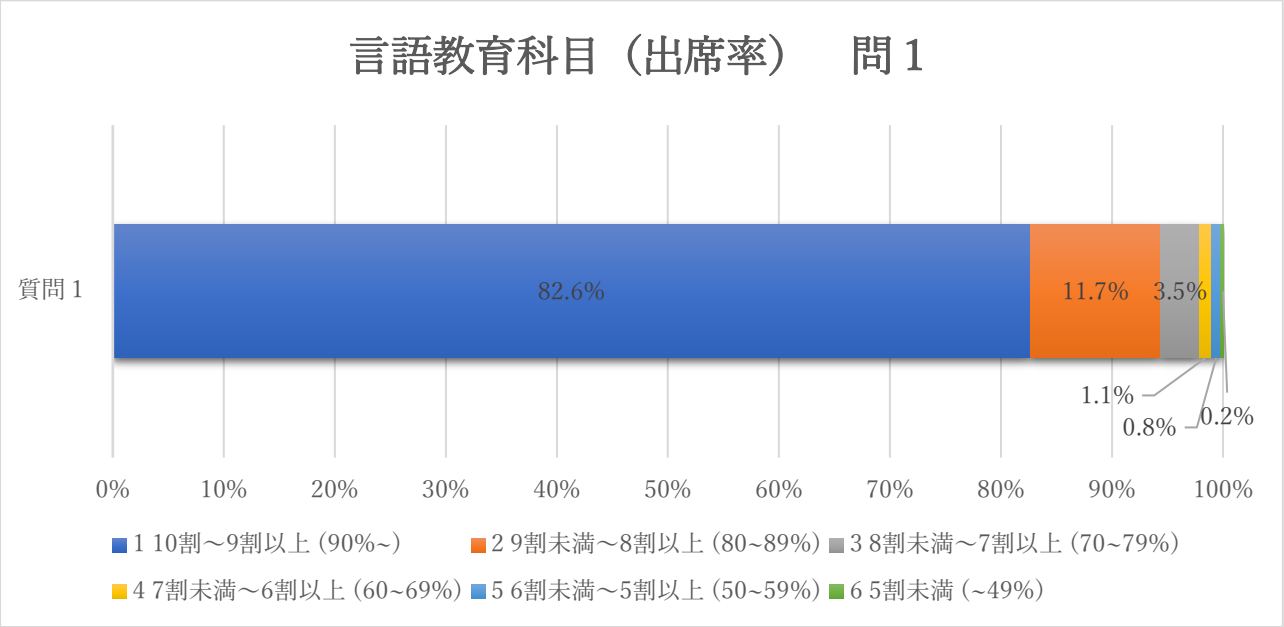
E. 授業外学修時間について

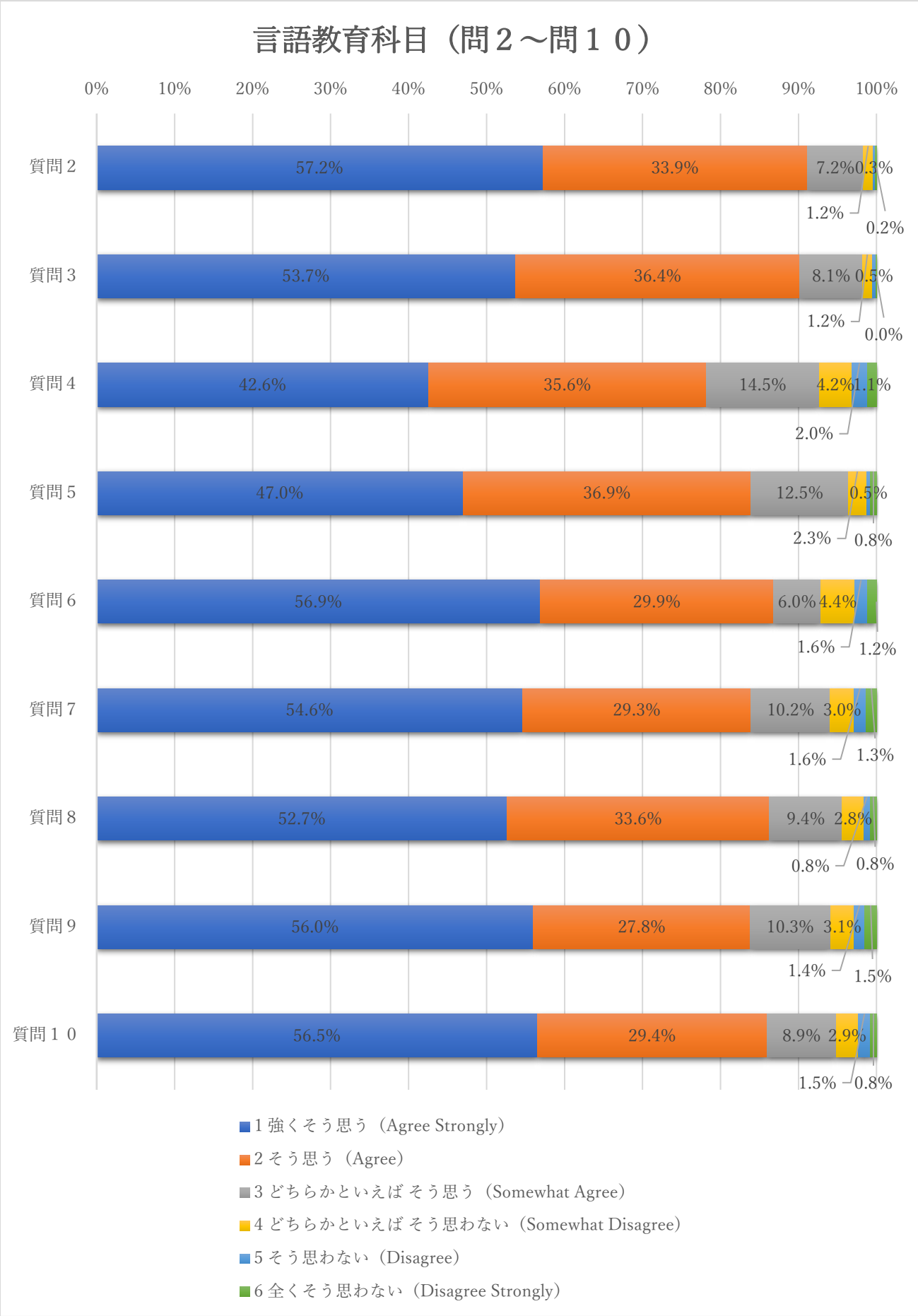
週１回の授業に際し４時間の授業外学修が必要となる２単位科目が多い専門教育科目での、４ 時間以上と回答した学生は、今回の結果は7.9%で昨年度と同じ数字であり、やはり圧倒的に学修時間不足であることを示している。特に全体と比較して、⑥の回答者が15.4%もいること（昨年度は21%）は問題と言わざるを得ず（授業に出席するだけになっている）、教養科目と同様、講義系の専門教育科目におい

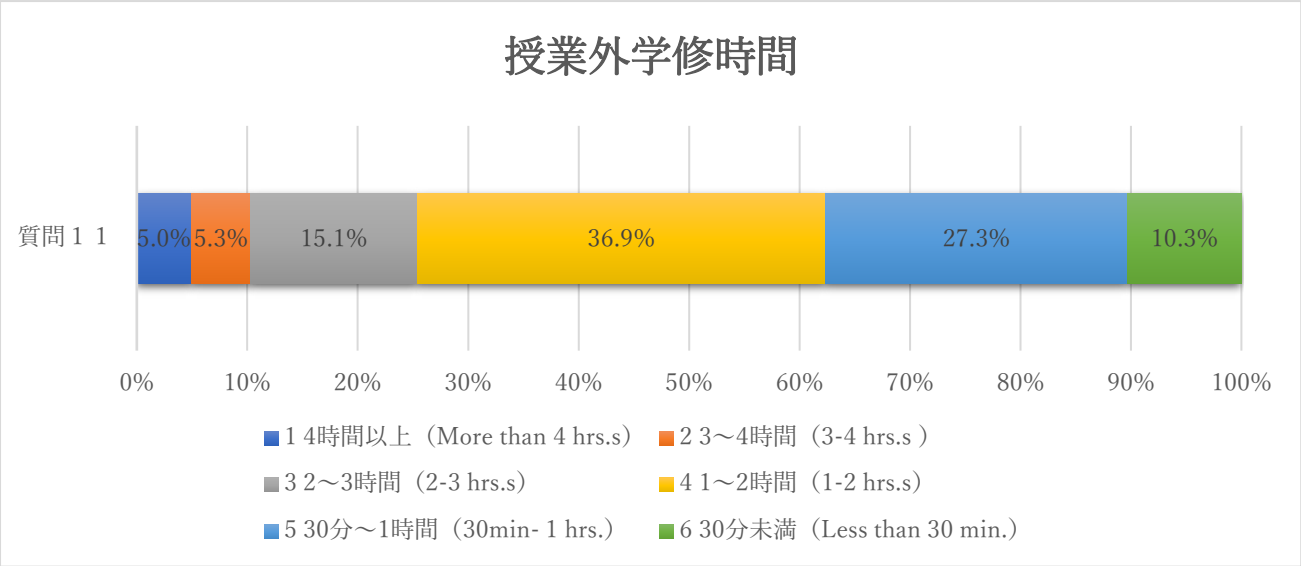
ても授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する授業科目設計の実質化が確実に求められることになる。もちろん、繰り返しになるが、学生たちの授業外学修時間を担保する教育課程全体における科目配置も同時に検討されなければならない。

＜言語教育科目について＞

言語教育課程としての全体的な傾向としては、ほぼ学部教育課程全体の平均と同程度の結果 （科目毎では、全体科目の傾向を上回っている科目もあれば逆もあるが）となっている。これは過去においてとほぼ同様であり、大きな変動はみられない。




言語教育科目（問２～問１０）
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
質問２
57.2%
33.9%
7.2%
0.3%
1.2%
0.2%
質問３
53.7%
36.4%
8.1%
0.5%
1.2%
0.0%
質問４
42.6%
35.6%
14.5%
4.2%
1.1%
2.0%
質問５
47.0%
36.9%
12.5%
0.5%
2.3%
0.8%
質問６
56.9%
29.9%
6.0%
4.4%
1.6%
1.2%
質問７
54.6%
29.3%
10.2%
3.0%
1.6%
1.3%
質問８
52.7%
33.6%
9.4%
2.8%
0.8%
0.8%
質問９
56.0%
27.8%
10.3%
3.1%
1.4%
1.5%
質問１０
56.5%
29.4%
8.9%
2.9%
1.5%
0.8%
1 強くそう思う（Agree Strongly）
2 そう思う（Agree）
3 どちらかといえば そう思う（Somewhat Agree）
4 どちらかといえば そう思わない（Somewhat Disagree）
5 そう思わない（Disagree）
6 全くそう思わない（Disagree Strongly）



設問区分ごとのコメント

A. 受講者自身の自己評価について

問２に関して、程度の差はあれ意欲的に授業を受けたと自己評価する学生が９割以上（98.3%）いることは良いが、④～⑥の否定的回答が本年度1.7%、昨年度1.8%と少数であるが、一定程度は存在するので、言語教育科目の教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

B. シラバスについて

科目選択の際にシラバスに目を通していない学生（昨年度11.6%、本年度7.3%）が、教育課程全体の6.6%よりやや多く、一定数存在していることは問題である。他の課程に比べてこの数値が高いのは、取るべき科目があらかじめ年次やレベルで決まっていることが多く、シラバスを見る必要を感じていない者が多いということかもしれないが、言語教育科目の選択においてもシラバスを読むことの重要性を引き続き説くことが必要である。教員が提示しているシラバス自体の評価（問５）は、教育課程全体の評価と変わりなく高い（①～③合計96.4%）。

C. 担当者と授業について

当該項目では、問６から問９において、９割以上からおおむね肯定的な授業評価を受けているといえる。教養教育課程や専門教育課程と比べてみると、特に問９（担当者の応対）が若干高い結果が出ている（言語94.1%、専門90.2%、教養87.3%）。教養教育科目や専門教育科目に比べると総じて少人数のクラスが多く、学生が質問しやすい環境になっているためではないかと思われる。

D. 授業の成果について

問10の授業が有益ではなかったと回答をした学生が5.2%（昨年度4.1%）存在するが、おおむね言語教育科目の授業成果をかなり肯定的に受け止めている学生が多いととらえて良いと考えられる。ただし、一定程度消極的評価の学生が見られることに注意したい。言語教育科目の場合は一旦学習につまずくと後で取り返すのが難しくなり、休退学につながりやすい傾向があるため、繰り返しになるが、教育課程上の意義などを今一度学生に意識づける必要がある。

E. 授業外学修時間について

言語教育科目の場合、週１回の授業１単位当りで授業外学修１時間となっているが、１時間未満の学

生は本年度37.6％、昨年度37％で、やはり学修時間不足であることを示している。特に全体と比較して、⑥（30分未満）の回答者が10.3％もいること（昨年度は8.2％）は問題と言わざるを得ず（授業に出席するだけになっている）、教養教育科目や専門教育科目と同様、授業外学修で何をすべきかを指示するのみでなく、これを点検・評価する授業科目設計の実質化が確実に求められることになる。もちろん、繰り返しになるが、学生たちの授業外学修時間を担保する教育課程全体における科目配置も同時に検討されなければならない。

（文責：2020 年度教育支援部長 小鳥居）